ここは、とある地方貴族が抱えている別邸の地下室。

その地方貴族とは、森に住んでいたエミリアを捕まえて調教師、ゴッデスに売り渡した例の貴族である。

そしてこの地下室を住処にしているのは、そのエミリアの初期調教を行った調教師である。

いかにもな中年らしく、醜く肥え太った小柄な男である。

「♪～♪～」

調教師は上機嫌に口笛などを吹きながら、地下室への階段を下りていき、自分専用の調教室へと向かっていく。

「デュフフ、デュフフフ。楽しみだなぁ♪　前回の……えーと、名前はなんだっけ？　忘れちゃったけど銀髪のハーフエルフちゃんは中途半端で残念だったけど、今回の娘は好き放題やっちゃっていいって話だしぃ」

不気味な笑みをたたえながら、調教師は手に持った小瓶を振る。

最近、怪しげな薬師との取引があり、そこで一般的には出回っていない色々な薬を購入したのだ。今調教師が持っているのもその内の１つ――聞いたところによると、都合よく部分的に記憶を消せる薬だという。

その効果は、既にどうでもいい奴隷で試し済み。

その奴隷は調教中の一切の記憶を失い、自分を穢れの無い清楚な処女だと信じ込みながらも、調教師が仕込んだ淫らな身体までもが元に戻るはずもなく、処女だと信じ込んだまま、どこかの貴族に売られていった。

身体は淫乱であるにも関わらず、自分のことを穢れの知らない処女だと信じ込んでいる奴隷は、クライアントに評判が良く、それ以来この調教師はとことん自分の好きなように調教をすることを許されたのだった。

「今回の娘はとってもボク好みの女の子だから、マジで楽しみだなぁ♪　青髪巨乳のちっさい娘。名前なんて言ったけなぁ。あ～、勃起とまんね♡」

涎まで垂らしながらぐふふと笑い、妄想で股間を隆起させる調教師。そのまま地下の調教室へ辿り着き、ドアノブに手をかける。

「そうそう、思い出した♪　レムちゃんだ、レムちゃん♡　やっほー、レムちゃん。元気にしてたかぁい？　キミのラブラブヤリチン彼氏が、今日もイチャラブしにきたよぉ」

「むぅ～！　む～！」

　ガチャリと音を立てて鉄製のドアを開ける。

　部屋の中はいつもと変わらない。隅の方に簡素なベッドがあり、その他には様々な調教道具などが置いてある棚。奥の方の別室は、トイレや風呂などの水回りの設備が整っている。

　そしてベッドの上には、青髪の可憐な少女が、両手両足をベッドの柵に拘束された状態で横たわっていた。

　身に着けているのは乳房や恥部が丸出しになっている下品な改造メイド服。下半身はまだショーツを履いているものの、上半身は下着を身に着けていないため、豊満な乳房がポロンとこぼれ出ているように露わになっている。

　そして身動きが出来ないその少女――レムの腕には、点滴針が刺さっている。ベッドの側に立てられた点滴台にぶら下がっている袋の中にあるのは、薄ピンク色の怪しげな薬液だった。

「む～！　む～！」

　レムは猿轡もされており、唾液がだらだらとこぼれ出ている。顔も真っ赤に染まっており、全身には汗が噴き出ていて、発情した雌の甘い匂いを部屋中に充満させていた。

「デュフフフ♪　良い娘にしてたかい、レムちゃん？　それはまだ試したことのない、惚れ薬ってやつみたいだよぉ。何でも直接脳にキマるガチヤバイやつみたいだけど、なーに大丈夫。最終的にはこれで記憶をトバしちゃうから、最高にハイになっちゃおうねぇ♪」

　調教師はそう言いながら持っていた小瓶を棚に置くと、ベッドに拘束されているレムの方へ向き変える。そしてべろべろと舌なめずりをしながら、欲望にギラついた瞳で、半裸状態のレムの肢体を舐る様に見つめる。

「デュフフフ。それじゃ、レムちゃんはキスアクメ奴隷嫁にしてあげちゃおうかな♡　もうベロチューしたくてたまらない、ドスケベ変態エロメイドにしてあげるね♪」

「んむ〜！　むううううっ！」

　訳の分からないことを言いながらベッドの上に乗ってくる調教師。レムは怯えたようね声を漏らしながら逃げようとするが、拘束は硬くて決してほどけない。

　そして調教師がレムにのしかかるようにして上に乗るとレムの猿轡を外す。

「っぶはぁ……はぁ、はぁ……ぜえ……」

　唾液の糸をねっとりと引きながら、ようやく口を解放されたレムは全力で新鮮な酸素を這いに取り込む。そんなレムの顔を、調教師は両手で挟むように固定すると

「それじゃレムりん♪　愛のキッスを……」

「い、いやっ……！　んむうううう〜〜」

　勿論拘束されているレムには抵抗が出来ない。顔を背けることも出来ないまま、調教師の分厚い唇が迫ってくる。

「ぶちゅっ♡　ちゅば……んちゅっ♡　ぢゅるるるっ♡　ぢゅっ、ぢゅっ♡」

「んぢゅううう……んむっ♡　んく……んちゅ……ぢゅっ♡」

　汚い唾液の音を立てながら貪るようなキスが十分以上も続いていく。

　調教師は欲望の赴くまま、抵抗出来ないレムの柔らかい唇と舌を味わいながら、股間を大きくしていくと、それをレムの腹に当てる。その間も、怪しげなピンク色の薬剤は絶え間なくレムの体内で注がれ続けている。

　そして調教師の下で、レムの小柄な身体がビクビクと震え続けている。

「っぶはぁぁぁぁ〜〜〜♡　ああ、ベロチューサイコー♪　ラブラブチュッチュ気持ちいいね、レムりん♪　ほら、舌を伸ばしてぇ♡　れろぉぉぉん♡」

「はっ、はっ……んれろ……れろ……」

　ようやく唇が離れると、今度は口の中ではなく外で舌を絡めようとしてくる。調教師が伸ばした舌に絡めるように、レムも舌を伸ばしていく。

「れろ……れろ……んっく……はふ……」

「ああ、レムりん♡　目ぇ閉じないで、ボクの眼を見ながら舌を絡めるんだよぉ♡　はふ……れろ……ちゅば……そうそう、その蕩け眼最高だね♡　惚れろ♪　ベロチューでボクに惚れろ♪　れろ……ちゅば……」

　見つめ合ったまま、レムと調教師が下品に舌を伸ばし合って舌を絡め続ける。

　濁ったような調教師と視線を絡め合わせながら、理性をドロドロにする謎の薬液を体内に注がれ続けているレム。

（訳が分からないっ……どうして、こんなに胸がドキドキして……お腹が……っ……！）

　目尻がトロンと下がってきて、下腹部が痛いくらいに疼いてくる。

「はむっ……ちゅば……ぢゅううっ……♡」

　気づけば、伸ばされた調教師の肉厚な舌を、レムは積極的にしゃぶりながら唾液を嚥下するようになっていた。

「っはぁ……はぁ……♡」

　長いキスが終わり調教師の顔が離れると、レムは名残惜しそうな表情をしながら舌を伸ばしたままになる。2人の舌が唾液の糸で淫靡に結ばれていた。

「んふふふふ〜♡　いいね、いいねぇ。その雌顔。ボクのチンポも興奮して、イラついてるの分かるかい？」

　調教師はジュルリと自分の唇の周りに付いた唾液を舐め取りながら、むき出しになっているレムの乳房を思うがままに乗る。欲望のままに乱暴に乳房を揉みしだかれて、レムは動けない中でビクビクとしながら、凄まじい快感と多幸感が脳髄に昇ってくるのを感じる。

「うっ……くぅ……はぁぁっ♡」

「くうぅ〜、そんなドスケベな雌声出してぇ♪　ボクのこと誘ってるのかい、レムりん？」

「バ、バカなこと言わないで下さい……はぁ、はぁ♡　あ〜〜……♡」

　絶え間なく注がれるピンク色の薬液がレムの理性を焼いていく。

　むにむにと形を変える程に大胆に乳房を揉みしだかれ、更にその先端部を指でコリコリと摘まされれば、レムは蕩けた甘い声が出るのを止められない。

「恋人におっぱい揉まれて、乳首コリコリされて気持ちイイね、レムりん♪　あ〜、気持ちいい気持ちいい。恋人のチンポイラつかせて、悪い子だぁ♪　ちゅば……ちゅ」

「んうっ……ああっ♡　はぁぁ……」

　調教師の分厚い舌が首筋を舐りながら、調教師はズボン越しに隆起した股間をレムの腹部に擦りつけるように身体を動かしていく。

（ど、どうしてレムがこんな目に……何も、考えられなくなって……）

「おほぉぉ♪　いいね、いいねぇ。そのうっとり顔。幸せそうだぁ♪　可愛いよ、レムりん♡」

「っあん♪　だめっ……あああっ♡」

　ちゅばちゅばと調教師がレムの乳房を貪り始める。可愛いと褒められれば、レムは更に下腹部を疼かせて、拘束された四肢をビクビクと反応させてしまう。

「あああああっ。もう辛抱たまらないよぉ、レムりん。ほらぁ、こんなにボクのチンポイラついてるんだよぉ♪」

「あっ、あぁぁ♡　す、すご……大きい……♪」

　調教師が興奮したようにベルトをカチャカチャと外すと、すっかりいきり立っている肉棒をレムの眼前に突き付ける。先端からはトロリと先走りが垂れており、強烈な雄臭と熱気をレムに放っていく。

「ほら、レムりんも愛してっ♡　ボクのイキリチンポ、咥えてよぉ」

「んむううっ？　んっ……んんんんっ……」

　調教師がレムの頭部を固定して、その小さな口に肉棒をねじ込んでいく。抵抗出来ないレムは、最初だけ唇を閉じて抵抗を試みるが、火傷しそうなくらいの雄の熱さに、呆気なく口内を蹂躙されてしまう。

「おほぉぉぉ……あったかくて、きっっもちいい♪　おほっ、おほおおっ♪」

「んむ゛っ……んぐ……ん゛っ……」

　調教師はレムのことなど構わず、己の欲望のままに腰を振ってレムの口を犯していく。口の中で暴れる肉棒からは、どんどん先走りが溢れていき、鼻を突き抜けるような強烈な雄の匂いと味がレムの脳を痺れさせてくる。

（く、口の中でビクビクってしてるっ……レムの口で、男の人のアレが悦んでるっ……♡）

　調教師の喘ぎ声と口の中の肉棒の感触で、レムは口を良いように使われているにも関わらず、胸をキュンとときめかせてしまう。

「っ！　おおおおぉぉう……レムりん、積極的ぃ♪　そうそう、そうやって舌でさきっちょの方刺激しながら、もっと唾液も絡めて……うひいいいっ♡　気持ちいい、気持ちいい♡　チンポ気持ちいいよぉ♡」

「はむっ……んちゅ……ちゅばっ……♡」

「あ゛〜〜……いいっ♪　いいよ、レムりん♪　もっときったねえ音出して、本能むき出しにしてしゃぶれっ♡　頬をパコパコして、ひょっとこみたいなアホ面見せてみろっ♪」

　乱暴に扱われながら、レムは口の中の肉棒を奉仕するように、吸い立て始める。当然経験のないレムは、最初はぎこちなかったが、調教師の指示を素直に聞き入れていき

「ぢゅるるるっ♡　ぢゅぼっ、ぢゅぼっ♪　んぢゅうううううっ♡　ぢゅるぢゅるぢゅる……」

「うほおおおおっ♪　ヤッベえええええ♪　レムりん、ドスケベ過ぎだろぉ。おっ、おっ♡　出る出るっ♡　恋人ザーメン、口マンコに発射するよぉ♡　ほーれ、惚れろ惚れろぉぉぉぉ♡」

「んぐうううううううう〜〜〜〜」

　レムの頭を抱え込むようにして、喉奥まで肉棒を突き入れる。そして思い切り白濁を発射しながら、調教師は点滴の管へ手を伸ばし、薬液の勢いを最大になるまで緩める。

「んむう……けふっ……ごほっ……っあああああああ♡」

「おほぉぉぉぉう♪　おっふ……んほおおおおお♡」

　調教師とレムの喘ぎ声が重なり合う。

　喉に絡みつく濃厚な白濁を喉奥に注がれて、苦しそうに咳き込むレム。味も匂いも全てが雄のものに包まれながら、体内へ注がれる謎の薬液がレムを狂わせる。

「あっ♡　うううっ♡　はぁー、はぁー……♡　こ、こんなの頭がおかしくなりそぉ……幸せで一杯になっちゃう♡　姉様のことも何もかも、どうでもよくなっちゃう……♡」

　口の周りを精液だらけにして、蕩け切った甘い声を出すレム。そんなレムの顔を嬉しそうに観察しながら、調教師は勃起を保ったままの肉棒をレムのショーツへと擦りつける。

「うほほ♪　濡れてる、濡れてる♪　びっしょびしょ♪　あ〜、そういやぁお姉ちゃんは未調教のまま先に売られたんだっけぇ？　出来れば姉妹一緒に可愛がってあげたけどぉ、レムりんが可愛すぎるから、どうでもいいか」

　調教師は腰を動かし、ショーツ越しにレムの割れ目を肉棒で擦り上げていく。勿論レムは下半身も動けない状態なので、その刺激を与えられるがままになっている。

「ああぁぁぁ〜〜〜♡　い、いやらしいことで頭一杯になりますっ♪　本当に、どうでもよくなるっ……」

「良い感じのクズ雌になってきたねぇ♡　このままオマンコでしか物事考えられないドスケベ恋人になっちゃえ♡　ほら、ほら。どう、ボクの恋人チンポ♡　エロいでしょ？　エロ過ぎてヤバくない？」

「あっ、あっ、あっ♡　擦れてるっ♡　レムの大事なトコロに――」

「オマンコだよぉ♪」

「レムのオマンコに、男の人のアレが――」

「オチンポだよぉ♪」

「おちん……ちん……が――」

「チンポだよ、チンポ♪　オマンコにチンポが擦れて、どうなの？」

「き、気持ちいいっ……♡」

「何が？」

「オ、オマンコですっ♡　レムのオマンコ、気持ちいいっ♡」

「どうしてぇ？」

「おちんち――チンポが擦れてっ……♡」

「気持ちいいんだ？」

「オマンコにチンポが擦れて気持ちいいですっ♡　このチンポっ、エロ過ぎてヤバイですっ♪　んちゅうううっ……ちゅば……ぢゅううっ♡」

　レムに下品な淫語を刷り込むようにしながら性器同士を擦り合わせる調教師は、レムが指示通りの言葉を言えるとご褒美と言わんばかりに口づけをする。

　クチュクチュと唾液の音を立てながら、先ほどと同じような濃厚な舌の絡め合い。

（あ、頭おかしくなるっ……幸せで一杯♪　気持ちいい、気持ちいいっ♡　姉様、ごめんなさい。レムはキスとチンポで、頭が幸せにっ……♡）

　調教師の下で白目を剥きながら、ビクビクと小刻みに震えるレム。

　再び十分をも超える長いキスを終えると、レムはだらんと舌を伸ばしたまま、調教師の瞳を見つめる。

「気持ちいいねぇ、レムりん♪」

「は、はい♡　気持ちいいですっ……キスも、オマンコも、チンポも……全部エロくて気持ちいいっ♡」

　薬と調教師の手管で理性をドロドロに溶かされたレムは、目にハートマークを浮かべながら微笑んでいた。

□■□■

「はむっ♡　ちゅばっ……んんんぅ♡　ぢゅうううっ〜〜っ♡」

　四肢の拘束を解かれたレムは全裸になりながら、同じく全裸になった調教師の膝の上にのっていた。ベッドの上に座った調教師の上に跨るようにして、まるで恋人にするように首に腕に回し、夢中になって唇と舌を貪り合っていた。

「んはっ……ふううう……雌くさい匂いプンプンさせてぇ……♪　そういうスケベな娘には、いけないお薬を追加だぁ♪」

　口の周りを唾液でべとべとにした調教師は、拘束は解かれても点滴が繋がったままのレムの、薬液を調節する部分へ手を伸ばし、注入量を増やしていく。

「んっひいいいいいい♡　あひ、あひ……ぶちゅううっ♡　んぢゅるるるるるっ♡」

　大量に薬液を注入されたレムは、ビクビクと全身を痙攣させると、調教師の唇にがっつくように貪りつきながら、絶頂を迎える。

「ひひひひ♪　どう、どう？　いけないおクスリ、気持ちいいでしょお？」

「はひっ……ふひー、ふひー♪　キ、キスアクメ……またキメちゃいましたぁ♡　恋人ベロチュー、最高に脳みそキマっちゃいます……こ、このまま本当にベロチュー嫁になっちゃう♡　じゅるっ……♡」

　もはや理性の光を失った瞳で淫蕩な笑みを浮かべながら、レムも自分の口の周りに付いた唾液を美味しそうに舌なめずりする。

「あむっ♡　んんっ……ぶちゅうううっ♡」

　そして再びレムは下品に唇を尖らせて、調教師と唇を重ね合わせる。

　そして濃密に舌を貪り合う中、調教師の硬くて太い肉棒が、ぬるりと先走りを溢れさせながらレムの腹部に擦りつけられていた。

「ぶちゅっ♡　ちゅばっ♡　ちゅうううっ♡　も、もうらめ……お腹がキュンキュンして幸せになっちゃう♡　早く……早くぅ……」

「んふふふう♪　何を速くして欲しいのかなぁ？　そのトロトロになった脳みそで上手におねだり出来たら、言う通りにしてあげるよぉ？」

　調教師はベロリと肉厚の舌で、自らの口の周りについた唾液を舐め取りながら言う。

「レ、レムの初めてを捧げますっ♡　この極太めちゃデカイラツキエロチンポで、レムの処女マンコをぶち抜いて、恋人マンコにして下さい♡　はぁ、はぁ……キス……ベロチューぅぅぅ♡　もっとぉぉぉ♡」

　血眼になりながら、レムは伸ばした舌を擦り合わせるようにすると、少し腰を浮かせて自らの秘裂で肉棒を咥えこもうとする。勿論レムはそこに雄のものを受け入れた経験など無い。にも関わらず、既に淫液であふれかえっており、その入口はパクパクと蠢いていた。

　薬と淫技で理性が崩壊し獣のように本能を追い求めるレムは、そのまま腰を沈めて肉棒を咥えこもうとするが、やはり受け入れたことがないためそう簡単にはいかず、淫液でぬるりと滑る。

「あひいいいんっ♡」

　そして肉棒が秘裂を擦り、陰核に亀頭が触れ合うと、レムは間抜けな声を出しながら身体を反らせる。

「お、オチンポがオマンコ擦れるだけで、頭が真っ白になりゅううっ♡　あむううっ……し、舌が入ってきて……ぢゅぼっ、ぢゅぼっ、ぢゅぼっ♡」

「ふひひひひ～♪　レムりんの唾液たっぷりの舌フェラ気持ちいい～♪　おっ、おっ、おっ♡　チンポイラつくぅ♪　分かる？　ねぇ、レムりん。チンポイラついてるの分かる？」

　調教師もレムの秘裂の感触を味わうように、しかし決して挿入はしないように、器用に腰を動かして肉棒でレムの秘裂を擦り上げる。

「んおっ♪　おおおお～～っ♪　チ、チンポイライラしてますぅ♡　レムのトロトロオマンコで、チンポイラついてりゅっ♡　あっ、イク♪　イラつきチンポで、イックううううううう♡　ぶちゅうううううっ♡」

　レムは再び野太い声を上げながら、調教師の唇に貪りつき、彼の太い腕に抱きしめられながら絶頂に達する。

「へっ、へっ……♪　キス、好きぃ♡　ベロチューアクメで脳みそ溶けちゃいましゅ……♡」

「ふひひひひ♪　それじゃ、いよいよ結ばれる時間だよ、レムりん♪　ぶちゅううううう♡」

　調教師は下品に唇を尖らせてレムの唇を吸うと、彼女の細い腰を両手で抱え上げるようにして、自らの肉棒の先端を秘裂の入口へあてがう。

「～～～っ♡　っ♪　っ♪」

　今まさに初めての男性器を挿入される瞬間、レムはすっかり瞳の焦点が合わなくなって、トロンと欲情に狂った表情をしていた。

「この何人もの美少女処女マンコを貫いて虜にしてきた最強のチンポでレムりんも快楽堕ちさせてあげるからねぇ♪　何か言うことあるんじゃないの？――って言いたいところだけど、もう理性吹っ飛んでるから無理かぁ♪　いっけねぇ」

　などとふざけたように舌を出して笑う調教師は、はっきり言って醜悪で不快以外の何者でもない。

　そして調教師は自分が言った通り、もはやまともな反応が返せないであろうレムの中へ肉棒を突き入れるべく腰に力を入れようとしたところ……

　レムが急に両手を調教師の肩に置いて、じっと見つめてくる。

「レムと、結婚して下さい♪　レムを貴女のお嫁さんにしてっ♡　んっほおおおおお〜〜♡」

「でゅふふふふう。さいっこーにチンポイラつかせてくれるじゃない。レムりん、サイコー♪」

　ここまで理性を破壊されても会話が出来るのは、鬼族としての種の強さだろうか。しかし度重なる薬の投与と調教師の淫技によって、思考も理性も全てはドロドロに溶かされている。

　それは中身だけではなく、肉体も快楽に順応していた。処女であるレムの秘部からは真っ赤な鮮血が流れ出るが、レムは痛がりも、逃げようとする素振りも見せない。

　むしろ自分から調教師の背中に腕を回し、初めての肉棒を気持ち良さうに味わうかのごとく腰を揺すっている。

「っんあああああ♡　結婚して♡　レムと結婚してっ♡　お嫁さんにして♪」

「デュフ、デュフフフ。なんて可愛い娘なんだ、レムりん。そんなに何回も言わなくても大丈夫だよぉ♡　ほらっ、ほらっ。こんなにセックスが上手なボクと結婚出来てラッキーだねぇ」

　パチュンパチュンと音が響く程に、調教師はレムの小柄な体を突き上げる。処女であるレムの身体を一切気遣わない、或いはその必要がないことを知っているかのような激しい動きだった。

「んふうううっ♡　ぎ、ぢも゛ぢい゛い゛〜♡　おっほおおう♡　す、ごいっ……セックス上手です♪　鬼がかったセックス、サイコーに気持ちいいですっ♡」

「ふーっ、ふーっ！　レムりんのスケベ嫁マンコもなかなか……♪　ほら、レムりん。誓いのチューしよ、チュー♡　レムりんの大好きなベロチューで、ボクら一生セックスやりまくりのラブラブ新婚夫婦だよぉ♡」

　レムの膣内の感触に唸っていた調教師は、そのままレムの目の前で誘う様に舌をべろんべろんと伸ばしながら揺らす。

「あっ、あああっ♡　げ、言質取りましたっ♡　ぶちゅうううう♡　ぢゅ〜〜〜〜っ♡」

　レムは嬉しそうに言いながら、調教師以上に下品な顔で肉厚の舌に貪りつき、唾液の音を立てながら舌を絡めて、唇を重ね合わせる。

　そしてレムは調教師の両手を指を絡ませ合うと、小さな身体を何度もビクンビクンと痙攣させる。

「デュフ、デュフフフ♡　チンポハメられながら、何度もキスアクメキメてるレムりんってば、マジで可愛いなぁ♡　ほら、レムりんも慣れてきたでしょう？　もっとケツ振って、旦那チンポを気持ちよくしてよ」

「ふぁ、ふぁいっ♡　愛しています、あなた♡　ぶちゅうう♡　ちゅっ、ちゅっ♡　だいしゅき♡　セックスだいしゅき♡　ちゅばっ♡　ぶちゅっ♡」

　調教師が腰を突き上げて、レムがそれに合わせるように腰を前後左右へ卑猥にくねらせる。初めての行為のはずなのに、その腰の動きは熟練した娼婦のようだった。

「んぎいいいっ♡　さ、さっきから奥突かれてっ……♡　イクっ♡　イキますっ♡　旦那様、イクっ♡」

　先に限界が訪れたのはレムの方だった、天井を仰ぐようにしながら息を荒げ、調教師へ限界を伝える。

「んほほほ♪　いいよぉ、レムりん。旦那チンポで、処女なのに脳アクメキメちゃいなよ♡　イチャラブトロトロセックスで、ボクのマンコ嫁になれっ♪」

　そんなレムに、調教師は容赦なく腰を突き上げて、レムの膣壁をゴリゴリと削り、最奥へ何度も肉棒を叩きつける。

「おっほおおおおお♡　お゛っ♡　お゛お゛っ♪　イクイクイクイクうううううう♡　中に……レムの中に出して下さいっ♡　ちゅば……ぢゅうううううっ♡　んほおおおおおおおお……っ♡」

　レムの膣肉が痙攣して調教師の肉棒を締め上げていく。そしてレムが絶頂に上り詰めたところで、雄の精を搾り取ろうと一気に収縮する。レムはその最高に幸せな瞬間を、最奥の子宮で受け止めようと、腰を深く沈めた状態で調教師の肥満体にがっちりホールドするようにしがみつく。

「おほっ……んほおおおおおっ♡　おおおおおお～～～っ♡」

　そしてレムの下で、幸せそうな雄の雄たけびを上げながら調教師は肉棒を爆発させるようにして思い切り精を吐き出す。

　そして性器だけではなく、固く握り合った手も決して離れないように、お互いに強く握り合いながら共に絶頂を迎える。

「ぅあっ……♡　あっ……ああっ……♡　出てるっ…♡　旦那様の、あっついザーメン♪　し、し、幸せです……ぅあああ……」

　下腹部にドクドクを注がれ続ける雄の精を感じながら、レムはうっとりと微笑む。

「はぁ……旦那様、キス……ベロチュー……好き♡　好き、好き♡　はふっ……れろっ……」

　レムが甘えるように言いながら舌を伸ばすと、調教師もそれに応えるように舌を絡ませる。するとレムの中に入ったままの肉棒が再び硬く大きくなっていくのを感じる。

「れろ……ちゅば……だ、旦那様……このままもう１回――あ゛あ゛あ゛あ゛～～～～？♡」

　レムが言い終わる前に、調教師は再び腰を動かし始める。不意に始まったピストンに、レムは思わず後ろに倒れそうになるが、調教師がレムの背中に腕を回して身体を支える。

「ふひひひひひ。当然だろぉ？　もうレムりんはボク専用の奴隷嫁マンコなんだから、きっちり分からせるまでハメまくるからぁ♪　あ～、サイコー♡　レムりんの新婚嫁マンコ、チョー気持ちいいっ♪」

　グチュグチュと音を立てながら、至福の声を漏らす調教師。その腰のピストンに合わせて、レムの小さな身体も上下に揺れる。

「あ゛〜〜〜♡　幸せぇ♡　このまま、ずっと愛し合いたいです♡　ベロチューセックスで、奴隷嫁マンコなの分からされたいでしゅう♡　ぶちゅっ……ちゅうううっ♡」

　レムは突かれながら、倒れそうになっていた身体を起こし、再び調教師の身体にしがみついて濃厚に舌を絡め合わせる。

　そうして２人は、延々と快楽を貪り合うのだった。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼

「邪魔するぞ」

　低い声でそう言いながら、貴族は地下調教室の鉄ごしらえの扉をノックする。

　彼がこの地下にわざわざ足を運ぶことは珍しい。彼が抱えている調教師が全く呼び出しに応じないため、仕方なしにわざわざこんな陰気臭い地下へと降りてきたのだ。

　そのノックの音が中の人間に聞こえているかどうかは不明だった。しかし貴族は構わず扉を開ける。

　中かはムワッとした性の匂いが充満しており、貴族の鼻孔を刺激する。思わず貴族は顔をしかめながら部屋の中を見回すと

「ふひぃ♪　珍しいですねぇ、わざわざここまでくるとは」

「お前が呼んでも来ないからだろう。例の鬼族の娘の首尾はどうだ？」

　予想に反して、調教師は身なりをきちんと整えており貴族を出迎える。

「というと、買い手が見つかったんですかぁ？　ボクの好きにしていいって言ってたくせにぃ？」

「例のハーフエルフを買ったゴッデス卿が、１人では足らぬと新しい奴隷をご所望でな。鬼族なら体力もあるし適任だと思ったのだが、よもや壊してはあるまいな？」

「あ〜……」

　貴族に言われると、調教師は頬をポリポリと掻きながら答える。

「あんな誰にでも股を開くクソビッチなんて、とっとと変態貴族にでも売り払って下さいよぉ♪　も〜、最近セックスセックスってしつこくてうんざしていたんでぇ、清々しますよ♪」

　と、吐き捨てるように言う調教師は、部屋の中のベッドへ視線を向けるように手を伸ばす。貴族が促されるままそちらを見ると、ベッドの上では――

「はぁ、はぁ……も、もっとチンポ、チンポくらさい♪　レムのユルユルヤリマンオマンコはぁ、だいしゅき旦那様チンポが欲しくて、マン汁垂れ流していますぅ♡」

　その美しい青髪や肢体を白濁まみれにしながら、自ら股をＭ字の開脚して秘裂を曝け出しているレムの姿があった。あまりにもな姿に、貴族は胸中で唾を吐く。

「これは使えるんだろうな？」

「デュフフフ♪　ご心配なさらず。例の薬師の薬があって、効果も検証済ですから。これさえあればあら不思議。どんな貞操観念吹っ飛んでるヤリマンビッチでも、瞬く間に記憶を忘れて、清楚で貞淑でお上品なお嬢様に戻りますから。あ、頭の中身だけで、身体はヤリマンビッチのままですけど」

「そうか」

　あまり好感の持てる男ではないが、こういったことに関しては優秀な男だ。間違いないだろう。容姿はともかく、性的な方面についてはこれだけの実力を有しておきながら、金銭や権力などには全く興味がなく、適度に好みの女をあてがっておけばそれだけで要求通りの動きをする。

　全く便利な男だ――と、貴族はほくそ笑む。

「明日にはゴッデス卿がお見えになる。それまでにその薬で記憶を消して、身体を清めておけ。彼のお眼鏡に敵うようにな」

「ぐふふふふ、分かりましたぁ♪　それより、次の女の子はいつ頃ですかぁ？　出来れば次はぁ、何でも物事自分通りにいくと思っている高慢な雌を分からせたりぃ、次期当主だとか女の癖に男の真似事している雌を分からせたりしたいなぁ。デュフフフ」

「あ゛〜……ご主人様ぁ♡　愛してます♡　チンポ、愛していましゅううう♡」

　暗くジメジメとした地下室に調教師の笑い声は響き渡り、レムの蕩けた声がこだまする。

　こうしてレムは、先にエミリアが買われていった貴族の元へ売られ、彼女と２人快楽に塗れた生活を送ることになるのだった。